

Passo a Passo

目 次

1	はじめに	2
2	教職	3
3	司書・司書教諭	13
4	学芸員	19
5	データ編	25

創刊に寄せて

専修大学教職課程協議会 委員長 蔭山 雅博

この度、私たちの永い間の
念願であった資格課程の機関誌
が、『PASSO ア パッソ—専
修大学資格課程年報』の名の下
に、このような形で刊行される
こととなりました。この間に、
同僚諸氏、OB・OGの諸兄姉、
そして、学生諸君の払われたご
努力に対し、衷心より敬意を表
するとともに、皆様と共にこの
刊行を喜びたいと思います。

周知のとおり、ここ十数年来
の社会情勢の急激な変化に伴っ
て、大学の使命とその在り方を
めぐる議論が国民的規模におい
て昂っています。大学は、かつ
てのように特権的機関として社
会に君臨するのではなく、一般
社会に開かれ、学習者の、そし
て社会の多様な教育要求に的確
に応えていくべきであるとする
見解が大勢を占めているように
思われます。

実は、我々の資格課程も大学
をめぐる社会情勢の変化や国民
世論の動向と無関係ではありま
せん。いや、むしろこれらに敏
感に反応していると言ってもよ
いでしょう。公的機関の専門職
員の養成を主要目的としている
のですから、時代とともに専門
職員の性格や資質が変われば、
大学における資格課程カリキュ
ラムの見直しが急務となるのは
当然です。事実、1995年以降
資格各課程の改善を求めて法律
や規則が相次いで改正されてい
ます。本学資格課程もこれに応

えてカリキュラム改革に取り組
んできました。いち早く対応し
たのは司書・司書教諭課程であ
り、公共図書館司書を養成する
司書課程のカリキュラムを充実
させる一方、司書課程から学校
図書館司書を養成する司書教諭
課程を分離・独立させていま
す。前者ではより専門性の高い
司書の養成を、後者では教育者
としての司書の養成を行ってい
ます。学芸員課程は「学芸員養
成科目の改善」要求に基づいて
カリキュラム改革を進めました。
該課程では地域住民の学習
活動を援助する一方、博物館な
どの推進する教育普及活動に資
することのできる質の高い学芸
員の養成に着手しています。

教職課程のカリキュラム改革
もまさにこうした文脈のなかで
進められています。そこでは教
員の資質向上が焦眉の急となっ
ています。従来のような専門の
学問の修得を重視する方針から、
教職者としての資質の充実を
図るそれへと転換されています。
教育課題に積極的に立ち向
かう力量と態度を備えた教員の
養成が求められているといっ
てよいでしょう。

さて、こうした資格課程の使
命と役割を遂行するためには、
我々は相当の覚悟のもと、日々
の絶えざる努力を積み重ねてい
かなければなりません。そして、
大学を構成する全ての教職員や
学生の皆様の理解と協力が不可



欠であると思います。さらに、
地域社会の各機関で活躍してい
る現職専門職員の支援や援助を
仰ぐことも必要となるでしょう。
機関誌創刊の主旨はまさに
資格課程に求められている使命
と役割を学内外の関係者の皆様
に理解して頂き、様々な協力体
制を作り出すことにあります。
そして、皆様と共にこの機関誌
を抛り所として一步一步（パッ
ソ ア パッソ）前進してい
きたいと考えています。

最後に、学内外において日頃
ご指導、ご援助を頂いている皆
様に対し、我々のささやかな資
格課程年報『PASSO ア パッ
ソ』の発展に温かいお力添えを
賜らんことをお願い申し上げます。

教 職 課 程

Index

1 カウンセリングとの出会い.....	4
—— 専修大学経済学部教授 梶山喜代子	
2 卒業生から.....	5
3 教員採用試験体験記.....	6
4 教育実習を終えて (国語)	7
(英語)	8
(社会)	9
(社会)	10
(公民)	11
(商業)	12

カウンセリングとの出会い

専修大学経済学部教授 梶山喜代子

「生徒指導論」の中で、カウンセリングについて説明しますが、学生の皆さんも大変興味を持ってくれるので、とてもやりがいがあります。私がカウンセリングと出会ったのは、大学の講義でしたが、カウンセラーは専門家であり、カウンセリングを受ける者はカウンセラーと呼ぶということを記憶していたくらいです。カウンセラーは現在はクライアント（来談者）と呼ぶのが一般的です。

本格的にカウンセリングを学ぶきっかけとなったのは、専修大学に就職し、女子学生のアドヴァイザーになってほしいと大学側から依頼されたことでした。昭和30年代のことで、専修大学もまだ商経学部と法学部の二学部の時代であり、女子学生も数えるほど少数だったのです。女性の専任教員も、私を含めて4名という数でした。現在の生田キャンパスの女子学生の数、各学部の女性教員の数を見ると、信じられないことでしょう。社会科学系の学部には女子学生が増加したのも最近のことですが、それに反して家政学部や文学部は志望者が減少したり、衣替えするところも目立つようになりました。短期大学も4年制に変わるところも多くなり、女子大学よりも共学4年制大学が好まれるようになってきています。こうした現状からは、女子学生にアドヴァイザーがなぜ必要なのかということは理解できないと思います。当時の女子学生の方々の悩みといえば、友人が作りにくい（男性の友人と気楽に交際することに馴れていない。しかし同性の友人は得にくい）といったことや、女子の更衣室やトイレが少ないといった設備面のことなどだったと思います。こうした小さな悩みだけなら良いのです

が、精神衛生的な問題の相談を受けた時は、どう対応して良いのか、私自身が困惑し悩みました。カウンセリングという内容の本は、いま数え切れない程出版されていますし、カウンセラーやメンタルヘルス・クリニックなども多くなった今日と比べると、まったくどこに相談し、どこで勉強すれば良いのか、手がかりがありませんでした。

こうした時、「相談心理学・沢田慶輔著」にめぐりあい、また沢田先生の関係する「学生相談研究会」の存在を知ったのです。早速、事務局のあった旧東京教育大学へ行き、参加を申し込みました。

この研究会で、カウンセリングの理論と面接の方法を学びました。ロジャースの来談者中心カウンセリングが代表的な理論でした。昭和30年の厚生補導（S. P. S）特別研究会で、カウンセリングの研究は大学生を対象として重視されるようになったと記されています。この学生相談研究会は、日本学生相談学会と発展しますが、毎年の研修会にはアメリカから講師を招待し、新しいカウンセリングの理論や方法を学ぶことが行われました。私もこうした研修の体験から、悩みや不適応を解消するのは、来談者であり、カウンセラーとしては、よく聴き、励ますことであるということを学びました。傾聴する心、姿勢はどんな場面でも基本となるものです。教育相談の場だけではなく、家庭でも職場でも生かせるものだと思います。

カウンセリングの学習で、私は



ビデオをよく用います。10年程前から関心のある「マイクロ・カウンセリング」では、面接場面をビデオで撮影し、発言や反応について話し合います。学生の皆さんは、非言語表現に関心を示します。視線をそらすとか、腕や足を組むとか、椅子の座り方など、相手にどう伝わるか、ビデオを視ることによって、自分自身の相手に対する態度に気づくことができるのです。言語が一番のコミュニケーションの方法と思われていましたが、身体言語、身ぶり語のほうが、はるかに強く相手に印象づけるという調査もあります。身ぶり以外では服装、髪形、メイクなども、相手に自分を伝えるものと考えられます。

「生徒指導論」で私自身のカウンセリングの体験をふりかえった時、私はカウンセリングに出会えて、本当に良かったと思います。エンカウンター・グループや心理劇などを知ることによって、自分自身を知ることができ、心が自由になるという感じを得ることもできたように思えます。学生の皆さんにも、カウンセリングを学ぶ楽しさを少しでも味わってもらえるよう、心がけていきたいと思っています。

卒業生から

鹿児島県加治木市立加治木中学校教諭（社会） 豎山 貴理（平成6年度 専修大学法学部法律学科卒業）

大学を卒業して5年が経ちました。教職に就いて考えたことや経験などを、多少の偏見が入っていると思いますが、みなさんのこれからの参考になればと書き連ねてみます。

さて、私が採用されたのは鹿児島県です。生まれも育ちも鹿児島。教職に就くには故郷で、という気持ちが強かったからです。採用も内定し、不安がなかったかといえは嘘になりますが、どのような教師になろうかという気持ちの方が大きかったことを覚えています。

赴任し、当初自分の理想で教育を行いたいと頑張りましたが、他の先生方との歩調が合わなくなりました。また、新採ではあるが「しっかりしなくてはならない」というプレッシャーを過剰に感じてしまい悩みました。それが2年ぐらい続き、自分は教師に向いていないのではないかと考え始めました。その時、在学中の講義で、ある教授が次のようなことをおっしゃっていたのを思い出しました。「教師は理想を持ちすぎないほうがいい。実態に合わせる方がいい。」この言葉を少しづつ心がけるようになってから、自分を取り戻してきたような感じがします。現在でも学校の方向性と自分の理想が異なることが多いですが、「立場」と「自分」を意識的に分けることにより、心のバランスが保たれているように思います。

次に学校が企業と違う点について触れてみます。私がこの世界に入り、驚いたことは会議で発言がしやすいということです。校長より年度当初に基本方針が出されます。しかし、おおむね話し合いにより物事を決めることの多い民主的な職場です。そのため口論になることもあります。これも教育

に賭ける情熱のあらわれからでしょう。ここ辺りが大きな違いではないでしょうか。

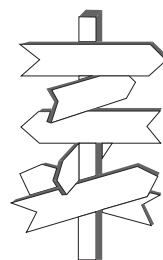
私は1年目から担任を持ち、部活動の顧問しております。そのため、お盆と正月ぐらいしか休みがありません。部活動で悩むことも多いですが、スポーツを通して生徒と接し、授業以外での様子を見ることができ、病みつきになっています。生徒と何かに向けて頑張っている教師に生徒は一目おいているようです。生徒と教師は同じ立場ではないと思いますが、お互いが高まり合っていくためのコミュニケーションをとることが何よりも大事です。私の場合は部活動がそれにあたりました。

さて、今度は教職に合格するポイントについて書きます。大学入試程度の学力が必要となる以上、学習については準備が早ければ早いほどよいでしょう。その他に私が考えることは、幅広く物事をみる体験をより多くしたほうがいいという事です。担当の教科の特性もありますが、海外、企業、東京のことなど生徒に広い視野で話ができることがいいでしょう。また、在学が二部だったこともあり、警察官、区役所職員、運送業などの社会人、そしてアルバイトなどの友人ができました。そのため異年齢の人と多く接し、社会の疑似体験をしたことなどを、現在、生徒に話しています。皆さんは、教師が話してくれる取り留めのないことが一番思い出だったという経



験がないでしょうか。それと同じです。自らの経験談がこれからの生徒の生きる力になると思います。旅行、読書、ボランティア、スポーツなど何でもその人の性格に応じたもので構いません。これが私の考える合格へのポイントです。

最後に、鹿児島は採用の競争率が他の県に比べると低いようです。不況の影響で、鹿児島出身者以外からの受験者が近年多くなっているようで、私はそれを嬉しく思っています。なぜなら、教職に就きたいという情熱が溢れているだけでなく、地元以外の違った観点で物事に接し、それが私たちにとって良い刺激になりそうだからです。とかく閉鎖的と言われるこの職場ですが、みなさんと新しい風を起こしていけたらと思います。長丁場になるので、気持ちがなえないうように注意しながら頑張ってください。ご検討を祈ります。



教員採用試験体験記

宮城県気仙沼向洋高等学校教諭（地歴・公民科） 山口 淳（平成5年度 専修大学文学部人文学科卒業）

私が教員を目指したのは、小学校の頃です。「担任の先生に憧れて」という、よくあるパターンでした。ただ、その夢は漠然としたものであり、「教員になるには具体的に何をしたらよいのか」という肝心なことを大学4年の段階でも全く考えていませんでした。教員になるという「夢」を「目標」に変えることが出来なかったのです。大学4年次に、採用試験を受験したのですが当然の如く不合格でした。目が覚めたのはその時で、「絶対に教員になる」という目標のもと、勉強を開始しました。大学在学中から真剣に教員を目指し、勉強をしている方々と比べるとかなり遅いスタートでしたが、ようやくH11年度採用試験に合格し、現在、宮城県気仙沼市にある気仙沼向洋高等学校に勤務しております。大学卒業から足掛け6年間の体験記が、今後採用試験を受験なさる皆さんの参考になれば幸いです。

採用試験の結果を順に追うと、H5年度（東京都＝1次不合格）、H6年度（北海道・宮城・神奈川＝1次不合格）、H8年度（北海道・福島・千葉＝1次不合格）、H9年度（北海道・福島・新潟・愛知・京都＝1次不合格）、H11年度（北海道・宮城・埼玉・鹿児島・沖縄＝宮城・鹿児島はA採用、他は1次不合格）となります。H7、10年度は仕事が忙しく未受験でした。私は大学卒業後、1年間のフリーター生活を過ごし、その後は福島県の私立高校で3年間の常勤講師、茨城県の私立高校で2年間の非常勤講師を経験しました。福島の高校はいわゆる指導困難校だったため、どうすれば教科に興味を持ってもらえるか、そのことばかり考えていた3年間でした。茨城の高校は、殆どの生徒が国立大学を

目指す進学校でしたので、教材研究ばかりの2年間でした。この2校での経験が、採用試験には大変役立ちました。平成11年度試験では、専門教科を世界史から地理に変更したのですが、やったこととはという指導要領を見直す程度です。国公立大学2次試験の論述問題（地理）を勤務校での授業で行っており、自分でも7～8割は解くことが出来たので何とかなるだろうと考えたからです。採用試験の専門教科に関しては、9割近く出来たと思います。教職教養は3月頃から本格的に取り組みましたが、中心に勉強したのは答申と法規です。教育原理や教育心理学は以前にまとめたノートを見直す程度でした。答申については、「その答申に書いてあることを（例えば、いじめ問題などについて）自分はどうの様に実践するか」ということだけを考えました。暗記するだけではなく、自らの考えをしっかりと持つ事が大事だと思います。一般教養は捨てた状態でした。数学や理科はやっても分からなかったし時間も無かったからです。それまで1次試験を通過したことは無かったので、宮城・鹿児島の1次を通過したときには正直驚きました。特に宮城に関しては、一般教養の数学・理科の問題が解けず、空欄のままでしたので尚更でした。2次試験は模擬授業と面接が中心になりましたが、模擬授業に関しては特別な準備はしませんでした。ただ、他の受験者は皆、自分で工夫した教材を使用していました。相手をしっかり見て、はっきり大きな声で話し、板書をきれいに書けば大丈夫だと思いま

す。面接に関しては「自分が教員になったら、何をしたいのか」ということを自分の言葉で話せるようにしておきました。答申そのままのことを、例えば「生徒に『生きる力』を持たせるような教育をしたいです」の様なことを話す他の受験者を以前からよく見ていて、何か変だと思っていたからです。『生きる力』って具体的に何？と聞かれたらお終いです。それならば最初から自分の考えを自分の言葉で話すべきだと思い、答申に出てくる様な言葉を使わないよう注意しました。私は自身の大学生活を振り返っての反省から「生徒に夢ではなく目標を持たせたい」ということを面接で話しました。これが良かったのかどうかは分かりませんが、何とか合格することが出来ました。

採用試験を受け続ける過程で、絶対的な自信があったのに1次試験で不合格になった経験は誰にでもあると思います。また、採用試験に合格するテクニックは無いと思います。採用試験には「運」が関わっているような気もしますが、その「運」を引き寄せるためにも、教員になるという「信念」を持ち続けて欲しいと思います。この体験記を読んだ教員を目指す皆さんが、素晴らしい教員になることを祈っています。



教育実習を終えて（国語）

実習校：兵庫県立鳴尾高等学校 専修大学文学部国文学科（LL08-0090B） 榊田 亜衣

6月の二週間、母校の高校で教育実習を行った。担当は二年生の国語科（現代文と古文）だ。

実習の前日にオリエンテーションがあり、その日に担当教諭にクラスの名簿と写真をコピーしていただいた。写真のコピーは不鮮明で判りにくいので許可があればカラーコピーにすると良い。また、前日ではとても覚えられないので、これらはもっと早くに入手するべきだった。



実習初日、朝のSHRで担当クラスの生徒たちと対面した。チャイムはもう鳴ったのにほとんどの生徒が着席しておらず、先生が大声で注意するのを見ることしかできなかった。その日は小テストがあり、時間があまりなかったので自己紹介だけをした。名前や大学名、部活のことなどを話したのだが、後になって生徒たちにそれらをまた聞かれたので、どうやら伝わっていなかったらしい。板書するかプリントを用意すると良かったのだろう。クラスの生徒たちと仲良くなりたかったので、座席表とクラス写真を覚えるまで見比べて、生徒を名前と呼ぶように心掛けた。そうすると生徒はよい反応をしてくれ、自分たちのことを話してく

れたり、私に対して質問をしてくれる。オリエンテーションのときに「あなたたちは高校の先輩としてではなく、教師として来たのだから、生徒にもそのように接するように。」と注意されていたので、自分の高校時代の話はあまりしなかったが、進路のことや大学生活のことはいろいろと話した。放課後の掃除を一緒にやって、その後雑談することが多かった。あとは、日直日誌の感想をできる限りたくさん書くことで

交流を図った。

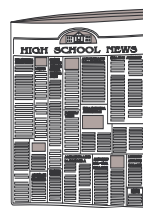
教科は、現代文を二クラス、古文を三クラス担当した。最初の三日間は担当教諭の授業を見学して、先生の授業の進め方や生徒たちの反応をみて、メモをとった。進め方や板書のしかた

が変わると生徒たちが混乱してしまうからだ。自分の高校時代に受けてきた授業のしかたと異なる点が多かったのも、気付いたことは何でもメモをとるのが賢明だ。担当教諭以外の授業も積極的に見学させていただくと良い。教科外の授業であっても、進め方や生徒に対する接し方などは学ぶところがとても多く、授業が終わった後先生方と意見交換し、アドバイスをしていた。そのときにとったメモも自分が授業をするときに役立った。

四日目に初めて授業をした。指導案にそって進めたつもりだが、緊張してすっかり舞い上がってしまった。生徒の反応どころではなく、指導案をどうこなすかに気を

取られ、一人よがりの授業になった。授業の回数が増すごとに緊張はほとんどしなくなったが、落ち着いてくると盛り上がり欠けてしまうので明るく元気よく授業するのがいちばんだと思う。授業終了後は担当教諭との反省会をしたのだが、そのときに受けたいろいろな注意を次回の授業に活かすことができた。あまり落ち込まずにプラス思考でいかないと実習は成り立たない。授業は私ひとりでは進めるものではなく、生徒たちと一緒に進めていくものだと痛感した。発問し、用意していた答えと違うものが返ってきても、なぜそう思ったのかをみんなで考えるように心掛けた。しかし、全てにこだわると授業が進まなくなるので、高校でどの程度まで教えるのかをもっと把握しておかなければならなかった。教材研究も全然できていなかったのも、回が進むごとに不安が大きくなった。ある先生に教材研究は一つの教材につき作家論と作品論を最低三冊は読まなければならないし、その教材にはいる前に全ての指導案を作り終えなければならないと言われた。私の実習に対する心構えは甘かった。

自分の甘さのせいで生徒たちには迷惑をかけてしまった。私自身まだまだ勉強不足なので、この実習で学んだことを忘れずにもっといろいろな経験を積んでいきたい。



教育実習を終えて（英語）

実習校：品川区立八潮中学校 専修大学文学部英米文学科（LE08-0031D） 小笠原 隆二

私 は東京都品川区立八潮中学校で教育実習を行いました。本来であれば自分の母校、あるいは大学の協定校などで行うのですが、私はそのどちらでもありませんでした。

品川区では母校での実習を受け入れていないため、同じ区内の中学校で実習を行う場合は、区を通じて受け入れてもらえるところを探すしかありませんでした。中学校での実習を望んでいた私は、母校の教頭先生にお願いして、そして八潮中学での実習が可能になりました。

実習を行うに当たって、私は周りの人とは違う状況に直面しました。それは八潮中での実習生が、私一人しかいなかったということです。教壇実習の批評をし合ったりする仲間がいなかったわけですが、このことが私に悪い影響を与えたのか、良い影響を与えたのかは実習を終えた今でもよく分かりません。

私は一年生全四クラスを教えることになり、一年三組を受け持つことになりました。事前には打ち合わせがあり、教科指導教諭から使用している教科書、副教材、進捗状況などの説明がありました。

教科指導教諭が担任をしていなかったため、学級運営については三組の担任の先生から説明があり、一年生全員の名簿と三組の生徒の顔写真を渡されました。実習開始までに二週間あったので大体の生徒の名前と顔は覚えられましたし、実習の一週間前に大学のほうで模擬授業を行えたので、何の不安も無く実習に臨むことが出来ました。

教壇実習は研究授業を含めても、十五時間しかありませんでした。これは他の人に比べると、五時間から十時間少ない数字です。これ

は間に運動会が入ってしまったため、初めの一週間は運動会の練習、予行、準備などでほとんど授業がありませんでした。しかし、ここでは一年生以外の生徒とも一緒に作業をして話しをすることが出来ました。

教壇実習も、研究授業も、英語科教育法や教育実習Ⅰ・Ⅱの授業で学んできたことと、指導教諭の指導、授業案集などを参考にしてスムーズに行えたように思います。塾に通っている生徒が多いようで、そちらの進度の方が早いらしく、授業中に質問をしようとすると、解答者を指名する前に答えが返ってくるのがほとんどで、その反応の良さに助けられた部分が大きいと思います。

しかし、最初では英語で得意としている生徒としか授業が行えていないと感じていましたが、得意な子にどんどん発言させて、そして不得意な子を引っ張っていくようにさせられれば、それは悪くないことだと指導教諭は教えてくれました。

授業を行うことより難しかったのは、学級運営です。学活の際には連絡事項だけではなく、その日一日の生徒たちの状況を把握しなければならぬこと、遅刻をしてきた生徒への対応など、普段何気なく繰り返されていることが一番難しいことなのだと感じました。私は第二週から朝と帰りの学活を任されましたが、十分という時間の間にこれら全ての事に気を配ることは出来ませんでした。

最終日には生徒全員に私の授業を受けた感想を書いてもらいました。その中でも驚かされたのが、「先生は授業が終わってホッとしたように笑顔になった。笑顔を忘れずに。」という内容のものです。生

徒たちは私が想像もしていないような強い好奇心で、私と接してくれていたことに気づきました。

教育実習に臨むに当たっては、就職活動と併行して行う人もいると思いますが、生徒たちは実習生が必ず先生になるものと思っています。生半可な気持ちで実習に臨んで、生徒たちの期待を裏切るようなことだけはして欲しくないと思います。全力で向かって行けば、その分だけ生徒たちは応えてくれますし、疲労がたまってきた時には生徒たちの笑顔が何よりの励みになると思います。



教育実習を終えて（社会）

実習校：横浜市立藤の木中学校 専修大学文学部人文学科（LH08-0170F） 児玉 健太郎

私が教育実習に行くに際して心がけたことは、2週間という短い期間の中で出来るだけ多くの事が体験できるように、控え室にこもってしまうのではなく、自分から積極的に動いていこうということと、実習生という独特の立場である利点を生かして可能な限り、生徒達に近づいていき、深く関わっていけるようにしようという2点であった。



まず、ひとつ目の方の、積極的に動いていこうということに関してラッキーだったのは、今回、実習生が私一人だったために、職員室に机を置かせてもらえたということであった。そのおかげで、普段の先生方の動きや職員室に訪れる生徒たちを見ることが出来、また、学年会や教科による話し合いなどにも参加させてもらい、授業時間以外での先生方の様子というものを知ることが出来た。

授業に関しては、指導教諭に出来るだけ多くの授業をやらせてほしいということをお願いして、最終的には24時間分もの授業を担当させてもらうことが出来た。授業参観の方も、他の教科の先生方にもお願いして、自分の授業以外は出来るだけ、見せてもらうようにしたのだが、他の教科の授業を見

せてもらえたのは、生徒の興味の引きつけ方など非常に勉強になった。他にも特殊学級の授業や、放課後にはいろいろな部活動や委員会活動に参加させてもらうことが出来た。

こうしていろいろな場に参加させてもらえたことは、もう一つの目標であった、生徒に近づいていくという点でも非常に役に立った。

私は1年生の授業を担当したの

だが、2年生、3年生とも親しくなることが出来たし、授業の時には出来ないような個人的な話をいろいろな生徒とすることも出来た。授業中はどうしても一人対全体という形に

なってしまうので、こう言った個々に話をするような場を持たせたことは非常に良かったと思う。

他にも、担任クラスの生徒とは毎日、手紙のやり取りをするようにした。手紙といっても小さく切った紙にフリートークと言って生徒にその日の事について何でも好きなことを書いてもらい、それに返事を書いて次の日に返すというものだったのだが、その手紙のおかげで、生徒一人ひとりのことを知ることが出来、対話することが出来たと思う。

こうした努力のかいあってか、たくさんの生徒が私に親しみを覚えてくれ、積極的に話しかけてくれるようになり、更には、授業に対しても積極的に参加してくれるようになった。自慢をする訳ではないのだが、不登校気味だった生

徒が毎日学校に来るようになったり、料理の得意な男の子が、最終日に私にプリンを作ってきてくれたりと非常に嬉しいことが幾つもあったのも、生徒と深く関わろうとした結果なのかなと思う。もちろん、授業の進め方について、色々と調べたり、考えたりすることはとても重要なことだし、私も実際、授業内容には工夫を凝らし、どのようにして生徒を授業に参加させ、考えさせるということに苦勞したのだが、少なくとも、学校にいる間は出来る限り、生徒達の中に入っていき、様々な話をし、触れ合うことに力を入れた方が私は良いと思う。勉強はいつでも出来るが、直接、生徒たちと触れ合うことは教育実習でしか出来ないことなのだから。

私は教育実習を通して、今までよりも一層、教員になりたいという気持ちが強くなった。みなさんも、そうなると素敵な教育実習が送れることを願っています。頑張ってください。



教育実習を終えて（社会）

実習校：六日町立五十沢中学校 専修大学経済学部経済学科（E08-0573F） 今井 基春

『教員と生徒の関係は、一人の人間と人間との関係。』これが私が6月の2週間に行った教育実習で得ることのできた、一番の教訓である。

私が実習を行ったのは、新潟県にある私の母校の中学校だ。担当クラスは3年生の31人のクラス。実習は2年生の歴史と、3年生の公民、教壇実習は学級活動、選択授業を除いて12時間を担当した。

実際に実習に行き、現場に身を置いてみるまでは、実習を成功させるためには、良い授業を展開することが最重要であると考えていた。だが、そうではなかった。良い授業の展開のためには、より重要なことがあったのだ。



それが『生徒との人間関係』だ。何より、生徒のことを最優先して考えていく必要があるのだ。これは『オープン・スクール』の考え方の根底のひとつにあるものである。

実習当初、多くの時間を教務室で教材研究のために費やすことが多かった。実際、生徒との交流の時間がなかなかとれなかった。すると、担当クラスの生徒が、教務室まで私を呼びに来てくれた。それから昼休みや放課後、できるか

ぎり教室や体育館へ行き、多くの時間の共有、共同の作業をするように心がけるようにした。日誌や教材研究は一人でいる時間にも、いくらでもできるが、生徒との信頼関係を作るためには、生徒のいる時間に行動するしかないのだ。

わずか2週間の間に指導教諭並の授業などというものはできるはずが無い。では、どのようにしたら生徒にとって良い授業を展開していくことができるかについて考えた。授業内容が良くとも、生徒がその先生話を聞いていないのでは意味が無い。そのために、生徒に好かれる先生になることが必要であると考えた。ただ馴れ合うこととは違う、信頼関係が必要になる。ある時は

同等の関係で良いと思う。しかし、生徒と教師になる時も当然必要になる。その切りかえをしっかりとしないといけない。共に学ぶ姿勢、共に過ごす時間が、互いに良い人間関係を作るために一番必要

なことである。

教員の仕事とは、日々の授業等、実習中にも経験することの他、校務分掌、保護者との情報交換、生徒指導・打ち合わせ等、非常に多い。空き時間などあるようで無いのが実情である。その中で生徒との時間を作ることは、身体的に非常に厳しいことが現実であるという。しかし、精神的には生徒に助けられることが多い。生徒との人間関係の上に授業、学校生活が成立することを忘れてはならない。

学校生活を送る上では、教員は常に生徒のことを最優先に考えていかねばならない。「我々が考える以上に生徒ははるかに敏感であり、純粋である。」私の指導教諭の言葉である。「生徒があつてこそ、学級経営が成立し、学校がある。」ということだ。

教員と生徒の間の人間関係の希薄さは、いわゆる『学級崩壊』を招く原因の一つにもなっている。

生徒に対して、決して、子ども扱いをしたり、我々教員の方が上の立場であるなどという意識を持つてはいけな。生徒には態度に表したつもりはなくとも、必ず気がついていくという。生徒とは、一人の人間同士として接していかなければいけないのである。

『先生らしくない先生、人間らしい先生。』指導教諭の先生の目指す教員の理想像であるという。私はその理想に賛同したい。『教員』という職業は素晴らしい。だが、その職業は、他の職よりも優れていると錯覚してしまいがちである。そうならないためにも、『教員である前に人間』として生徒に接していける、そんな先生になりたいと思う。

短くとも、私にとって本当に学ばべきことの多かった2週間であった。これら経験の中には、教員でなくとも人生において大切な教訓が多かったと思う。これからの人生においても、ここで得ることのできたものを活かしていきたいと思う。



教育実習を終えて（公民）

実習校：埼玉県浦和市立高等学校 専修大学法学部法律学科（J08-0682K） 松村 真理子

教

職課程を履修している人にとって、一番、気がかりに感じるものはやはり「教育実習」についてであると思います。私も実際そうでしたが、いざ自分の実習を終えてみると、結果的にはやって良かったと思いますし、この経験は、自分自身の宝物として一生忘れられない思い出となりました。しかしここにたどり着くまでには数々の苦労と不安な日々があるわけで、決して容易なことでは良い結果を得られたわけではありません。また、努力をしても、実習校の考え方や担当の指導教諭との相性等、運に任せる以外どうにもならない部分もありますが、（私の場合、母校ということもあってか、実習校も指導教諭も最高でした。）真剣に、そして誠実に取り組んでいけば必ず良い結果につながると思いますし、実習をやり遂げることで、自分にも自信がつきますから、皆さんには是非がんばってほしいと思います。私は高等学校での実習でありましたから、中学校で実習をする人には参考になるかはわかりませんが、自分の実習を通しての体験談や、感じたことを以下に述べておきますので、良かったら参考にしてみてください。



・実習前

教職を取っている人の中でも、教員採用試験だけでなく民間企業や公務員等との併用を考えている人もいます。実習中はもちろんのこと、担当する授業の範囲を遅くだされる人は、約1ヶ月程度は実習の為に要されると思っていたほうが良いでしょう。その期間に他の事もやれると思っていると思われ誤算となりますから、その時期を考慮して計画

的に行動するよう心がけてください。私の担当分野は「政治・経済の分野の中で好きなところ」といわれていたのですが、前もって高齢社会についての授業案を作っていたのですが、担当が高校1年生ということで問題意識として身近に感じる話題かどうか疑問を感じ、担当の先生と相談した結果、急遽、少子化についての授業に変更しました。その為、半月で授業案を新たに作り直さねばならず、ほぼ毎日徹夜でした。また、たとえ実習前に授業案を完成させていったとしても、担当教諭の指導や、実際に授業を行ってみてうまくいかなかった場合など、さらに手直しをしなければならぬので、実習中の睡眠時間は3時間ぐらいでした。これは私が特別というわけではなく、社会科の実習生のほとんどがそうであったので、そのつもりで、できる限りの準備は前もってしておくべきです。授業案作成時のアドバイスとしては、社会科は資料が命なので、授業案をあとから手直しする場合を考慮してやや多めに集めておいたほうが良いでしょう。あとは各自で臨機応変にやってみてください。

・実習中

健康には十分注意してください。体調を崩すと今までの苦労が水の泡になってしまうし、肉体的にも精神的にも本当に辛くなります。実習中は、十分に睡眠がとれない日がほとんどなので、体力が勝負です。気合いを入れて乗り切ってください。

授業については、内容は各自で異なると思いますが、共通して言えることは、生徒に参加させる授業を常に心がけることです。いくらよい内容を用意してきても聞いてもらえなければ（居眠り等）その案は潰れてしまうわけで、クラスごとの雰囲気や、その時間帯の環境（体育の後や昼食の後、また眠たくなるような気候の時の授業等）を把握し、すべて同じ流れではなく、各授業時に対応した進め方も必要となる場合があります。また、実習生であっても遠慮せずに生徒に問い



かけを行っていったほうがよいです。（私は生徒にこのことを注意されてしまった。）その方が生徒の参加意識が高まってちゃんと聞いてくれます。

HRでの過ごし方については、最初は孤独で辛いかもしれませんが積極的に話しかけて生徒と仲良くなりましょう。その方が楽しいし、生徒たちは何かと助けになってくれます。ただ、生徒と馴れ合いになりすぎるといざという時（生徒を静かにさせる時等）の指導に統制力が弱くなってしまいう場合もありますからはじめはつけましょう。でもあまりに抑圧的な態度でも反感をかってしまうので生徒との接し方はとても難しいところです。また、女の実習生に対しては男の実習生より生徒の視線が厳しいのは確かです、私の年は「魔女の条件」（女教師と男子生徒が恋に落ちるドラマ）ブームで男子生徒がきれいな実習生に興味を示すのが強く、その気はなくても男子生徒と仲良くしすぎること女子生徒が実習生に反感を抱くこともあったようです。なるべく同性から仲良くなっていったほうがよいと思います。（私は3枚目なので大丈夫でした。あ、でもそれ以前にその心配がなかったかな?）

いろいろ述べてきましたが、あくまで私の独自の意見にすぎませんから、他の方の意見も参考にしてみてください。実習は大変でしたが、それでも努力し続けることで、その一生懸命さは生徒にも伝わるもので、最後は生徒がかわいくて別れるのが辛いくらいでした。皆さんの実習でもよい結果が得られるよう、心より応援します。がんばってください。

教育実習を終えて（商業）

実習校：東京都立芝商業高等学校 専修大学経営学部経営学科（M08-0203A） 山口 千鶴

都 立芝商業高等学校は、全国の商業高校のモデルスクールということで、大変伝統がある学校で、感動が多かった。全校集会でも進路指導の先生から、「芝商は大学に例えると商業高校の東大である。」と聞いた程であった。生徒もその自覚がある為か、特に厳しくされている「あいさつ」に関しては大変驚く程良く出来ていた。例えば校内で知らない人に会っても必ずどの生徒もが「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」とあいさつをするのである。もちろん教育実習生である私に対してもそうであるので、廊下を歩くたびにあいさつの返事をして歩くのが大変な程であった。そして集会や号令で礼をするときは必ず5秒頭を下げているし、クラスによっては「よろしくお願いします」と「ありがとうございました」とまでしていた。



私は普通高校だったので、これが商業高校の特徴か、それとも芝商業高校ならではのかわからないが、とてもカルチャーショックを受けたことの一つであった。

私が想像していた教育実習生活とは異なり、とても大変な2週間となった。まず、生徒の態度であるが、初め実習生という者は正直言って興味を持たれる存在であり、生徒とのコミュニケーションに対

しては全く不安が無かった。しかし実際は初めはかなりよそよそしく、あるいは全く関心が無いというような対応に教育実習生全員が頭を悩ませた。たとえ話かけても話しかけた事の返事が返ってくるだけで会話にならず、生徒とのコミュニケーションにつまずいた。しかし、自分がホームルームや授業を担当するようになると生徒とのコミュニケーションも自然と増えた。だからなるべく早いうちに教壇に立つ機会をもらおうと良いであらう。

そしてもう一つ。実習生活は想像を絶するほどの忙しさであった。授業見学や教壇実習、そして終わりのホームルームを終えた後、生徒と一緒に清掃をし、学級日誌をチェックし教育実習日誌や、次の日の授業の指導案も書かなければならない。それらすべてやり終えたころにはもう下校時刻も過ぎていた。正直言って自分の時間を作る事が難しい。しかし、クラブ活動へは参加したほうが良い。それというのも、クラブ活動では生徒の本当の姿を見ることが出来るし、一番のコミュニケーションになる。クラブ活動へ参加するのとしなないとでは、実習生活に大きな差がでることになる。では、どうしたらクラブ活動へ参加する時間が作れるのであろうか。

実習の前半、自分が授業を担当する前の時間が最も大切である。授業を担当してしまうと、指導案を作り、その指導案を担当の先生に見せなければならない。そうするとまず、クラブ活動への参加は難しい。だから、比較的時間の作れる初めの時期に参加すべきである。そして、放課後はその時しか出来ない仕事以外は他の時間にやり、仕事の優先順位を早い時機に

見つけなければならないであろう。

どうしてそうまでして生徒理解に努めなければならないかという、クラブ活動や生徒とのコミュニケーションで一生懸命生徒を理解しようとすれば、生徒もそれに応えてくれ、こちら側を理解してくれようとする。そうすると例えばそのような生徒は逆に、授業中助けてくれたり、授業も一生懸命受けてくれているのが伝わってくる。

教育実習というのはもちろん教壇実習も大切であるが、2週間の間でプロの先生のような授業をするのはまず無理であるし、生徒もそれを分かっている。では何を目的とし、何を基準に実習生活に挑めば良いかというと、積極的に生徒と接触し、生徒理解に努める。そしてたとえ初めはどんなに自分と合わないと思った生徒でも、最後に「かわいい」と思えるようになれば、その教育実習は成功であると私は思う。



司書・司書教諭課程

Index

1 司書教諭への道	14
—— 専修大学文学部教授 後藤 暢	
2 町村立図書館の設置促進と私	15
—— 専修大学経営学部講師 荻原 幸子	
3 卒業生から	16
4 図書館実習を終えて (1)	17
(2)	18

司書教諭への道

専修大学文学部教授 後藤 暢

司書・司書教諭課程

今年度から、本学では司書教諭養成科目が大幅に改定され、司書教諭課程が、5科目10単位で再発足しました。これは、一昨年の学校図書館法改正につづく、文部省令の改正によるものです。

初年度の今年は、司書教諭科目の受講者がかなり増えました。新しく教師への道をめざす若い人たちが学校図書館に関心をもち、司書教諭資格を活用して教育に取り組むのは、喜ばしいことです。より豊かな学校教育をめざし、大いに力を発揮して欲しいと思います。

ところで、なぜ司書教諭資格をとりたいか、学生が記した志望の動機は、さまざまでした。何人かの学生は、これまで育ってきた小学校から高校までの学生生活の中で、学校図書館で多くの本と出会い、自分の世界をより深く、広げてきた経験を語り、そこで出会った「図書室の先生」の魅力に影響を受け、自分もその道を選びたいと思ったと述べています。この「図書室の先生」には司書教諭または司書、いずれも含まれているようです。その人の出身校だと聞いて専修大学を選んだケースも、珍しくありません。

今年の場合、「司書教諭」資格を持っていると教員採用のさい有利になると思ったから、という学生が増えたのが目立ちます。また、非常勤講師をしながら科目等履修生で受講しに来た人たちも、やはり本採用をめざして同じように考えています。

改正された学校図書館法により、平成14年度末までに大規模校には司書教諭を発令しなければならぬことになりましたから、教員の中に約3万人の有資格者が必要（文部省の試算による）とされています。教職受験関係の雑誌に「司

書教諭資格」が有利という記事が出たり、現に教員採用にあたり「司書教諭」資格の有無が問われた例もあるようです。もし、本学で司書教諭課程を履修した努力が実って、教員への道が開けるならば、それなりに喜ぶべきことでしょう。

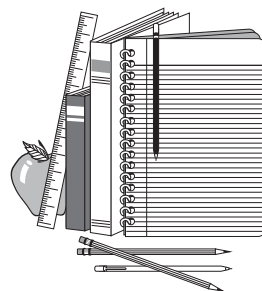
しかし、問題は、それからです。

司書教諭は「教諭をもって充てる職」であり、公立校の教員定数について定めた教職員定数法（略称）には、司書教諭のための定数はまったく認められませんから、現在の定数の範囲内で、学級担任や教科を受け持つ、普通の教諭としての仕事をしながら司書教諭の仕事もすることになります。相当の力量が問われます。

文部省が、全国の小中高校教員のうち「司書教諭」資格をもつ教員の数を調査したとき（平成9年度）、実は資格をもっているが名乗り出なかった先生がいたという話を、あちこちで聞きました。いま司書教諭になったりしたら大変だというのは、学校現場での率直な受け止め方なのでしょう。本学に受講に来た中学校の非常勤の教員も、「学校図書館は面白そうだけど、現場では荒れる学校で対策に追われていて、正直なところ“図書館どころではない”のです」と話していました。

学生諸君はこのような時に、新採用で教員、しかも司書教諭という道を選ぶわけです。司書教諭以外に専任の「学校司書」が配置されている学校は、高校を除くとまだ少ないのです。パートナーとしての司書の助けを期待することもできず、司書教諭が資料の選択、収集から利用まで、学校図書館運営全般を手がけなければなりません。司書教諭への道を選ぶ人は、安易な気持ちでなく、かなりの困

難を覚悟して、チャレンジ精神をもって取り組んで欲しいと思います。みなさんが、学校生活の中で追いつめられている生徒にも「図書室のあの先生」と印象に残るような司書教諭になり、学校図書館のおかげで授業が面白くなったと感じさせるような学校図書館を実現するよう願っています。



町村立図書館の設置促進と私

専修大学経営学部講師 荻原 幸子

司

書課程というのは図書館で働く専門職を養成する場なので、あくまで世の中に「公共図書館」が設置されているということを前提とした話が展開されるが、実のところこの前提は日本全体のごく一部の地域でしか通用しない。公共図書館は義務設置ではないので、設置するか否かを含めてすべてが各自治体の意志に委ねられている。現状の設置率は、都道府県100%、市区96%、町村は35%である。設置率というのは全自治体総数のうちで図書館を設置している自治体の割合のことをいう。すなわちこの数値から、全都道府県に都道府県立図書館が設置されていること、一部の市には市立図書館が設置されていないことがわかる。そして町村の場合は、町村立図書館を設置している自治体は全体の半数にも満たないということなのである。それでも私が学生の時にはまだ15%だったことを考えると、事態は格段に好転した。確かにここ数年間の町村における図書館設置の動きは目覚ましい。そして、設置された図書館の中には市立図書館を上回る施設規模や質の高いサービスを提供しているところも散見される。とはいえ、自分の町や村の図書館サービスを受けられない人々が依然として多数であることには変わりない。

果して公共図書館はなくてもよいものなのか。答えは当然のことながら否である。図書館は、豊富な資料や情報を住民に提供する場であり、人々の趣味に暮らしに、さらには仕事にも役立つ施設である。また、相談に応じる司書がいたり、人々の関心の高い事柄についての催し物が開かれる場でもある。こうした図書館が人々の生活の中に有ると無いでは、何かが違ってくるはずである。この“何か”は人それぞれに違いはあろうが、つまるところは公共サービスあるいは住環境に対する「満足感」「豊かさ」といったものである。

2年前に日本図書館協会の町村立図書館活動推進委員会の委員となった。

“町村図書館活動推進”といっても、実際には町村立図書館自体の数が少ないので、活動の主体は町村での図書館設置を促進することにある。“図書館がない”という町村の事態を直視することになった。委員会では1997年に全国の町村自治体に対して、図書館に対する考え方や意見を聞く郵送アンケート調査を実施した。その結果、多くの図書館未設置町村の行政担当者は図書館の有用性や意義を理解していることが明らかになった。しかしながら一方で、その大部分は図書館を設置する構想や計画が全くないという状態であった。理由は、「財源がない」「高齢化、宅地開発、学校建築、道路改良等が当面の行政課題であり、行政政策としての優先順位は低い」という切実なものである。“必要とは認めるが、今はそんな状況ではない。”というわけである。

こうなると図書館設置を促す立場としては、図書館は地域に“不可欠な”施設という視点での説得力ある提言をしていかなければならない。それは単に「豊かさ」といった抽象的なものではなく、図書館は設置自治体の住民に対して何ができるかといった、より具体的な効用を説くものでなければならない。あらためて図書館サービスの本質や可能性を考えてみることになった。“地域の情報拠点としての役割”や“ひとづくりを支援し、まちに活力を与える”などのキーワードが浮かぶが、まだ確固とした答えは見つからないでいる。

また、前述のように図書館設置は各自治体の意志決定によるものであり、最終的には町村長をはじめとする自治体行政上のトップの意志に因るところが大きい。図書館の設置を促す場合には、図書館の可能性や効用を説く一方で、地方行財政の現状を加味した実現性の高い方策を提言していく必要がある。まずは、役場の行政担当者と会話を

を成り立たせるところから始まるのである。従って、国の自治体に対する補助金、町村の抱える行政課題、県行政の役割など、国や地方自治体の行財政面に関する制度や実状等の知識が不可欠となる。私の書棚に地方行政に関する本が次々と並ぶようになった。



公共図書館もなかなか奥深い・・・とつくづく思っていたところ、8月27日の朝日新聞に「市町村、合併で3200→1000目標―数年かけ分権実現 自公推進合意」という見出しの記事が掲載された。国の政策として、現在約3200ある市町村を、数年後に1000程度とする市町村合併を進めるため、地方交付税や補助金の増額といった支援措置をすることが決まったとのこと。いよいよ市町村合併が具体化しそうである。市町村の自治体数が1/3になるということは、前述の“設置率”の数値は現状の図書館数のままでも自ずと高くなる。とはいえ、1自治体の行政面積がかなり広がるので、住民にとって図書館サービスが身近になったというわけではない。これまでは、住民に密着した図書館サービスの単位として、1町村1館を前提にしてきたわけだが、町村合併となればまた新たな方向性を検討しなくてはならない。

公共図書館とは、なんともダイナミックなシロモノであり、それがゆえに興味が尽きない。

司書・司書教諭課程

Passo a Passo

卒業生から

君津市教育委員会図書館建設準備室司書 四宮 理加 (平成7年度 専修大学文学部国文学科卒業)

私 が司書として働き4年が経った。教育部図書館建設準備室司書兼移動図書館司書というのが今の私の立場である。私の生まれ育った千葉県君津市という人口9万人の市には図書館はない。現在、千葉県の市で図書館がないのはわずか2市である。そして、私はずっと市民から望まれつつ、実現していなかった“図書館をつくる”という仕事をしている。

就職して2年目に図書館建設準備室が設置され配属された。幸運にも、準備段階から関わった図書館でこれから30年ともに育っていくことができるという図書館員にとって夢のような状況にある。しかし現実には、わからないこと、考えなければならないことだらけで、自分達は開館にむかって前進しているのか、このままで本当に市民に満足してもらえるような図書館サービスができるのか不安になることもたびたびである。

建設準備の中で出会った方々から、“図書館をつくる”というのは建物をつくるのではなくサービスをつくることだといわれてきた。はじめにこのまちの図書館は市民にどうサービスするのがあって、それに基づいた建物や、資料やサービスや人ができてくるはずだということである。仕事をしていくなかで、図書館について勉強する

ものならば誰もが一度はきくであろうこの言葉はどんどんその重さを増してくる。

私のまだ短い図書館員としての経験のなかで、いちばん嬉しかったことは、おはなしかいで一度しかしていないおはなしをこどもが覚えていて「あのおはなしして」といわれたことであり、最も悲しかったことはこちらのミスが原因で年配の女性に「いままで本を借りるのを楽しみに通ってきていたけど、そんなことばかりならもう来ない」といわれたことである。自分の仕事について考え、図書館員として働く自分のベースになるものはなにかと思うとき、学生時代に学ぶような理想ではないかと強く感じる。こうありたい、こうしたいという像に、ひとりひとりの利用者との出会い、ひとつひとつの資料や情報の蓄積が専門職をつくっていくのではないかと思っている。

司書という自分の持つ資格はよくいわれるようにただ資格でしかなく、「図書館の仕事をやりたい」という意思を持っている」という証明にしかすぎない。実際、4年が過ぎても「司書」というには、あまりに無知で恥ずかしく、利用者に対し申し訳ない思いをすることも多い。もちろん資料についてきかれたときに答えるための豊富な知識は専門性のひとつだと思うが、その一方でどれだけ人に優しくなれるかということも最近よく考える。こどもから大人、それぞれの目的でくる不特定多数のいろい



ろな個人と接するとき、すべての人に優しく親切にしたいと思いつつ、つつい忙しさに負け、雑な対応をしてしまい自分の人間としての狭量さ、未熟さを反省することも少なくはない。

よく1冊の本との出会いがある人の人生に与える影響についてきくことがある。ある人の人生を変えてしまうような大きな出会いを望みはしないが、「自分のまちにいつでも自分を受け入れてくれる大好きな図書館がある」とひとりでも多くの市民に思ってもらうための、毎日、毎時間の積み重ねをしていきたい。

司書になりたくても司書として働くのは、相変わらず厳しいときく。司書になりたいと勉強をしている人がいるという事実は、「図書館には司書がいないとね」と認識されなければと専門職として働いている責任と、もっともっと頑張らなくてはという起動力になっている。

私は、今、図書館員という仕事がとても好きで、とても大切にしている。公共図書館員には、人生の大部分の時間をかける価値も十分すぎるほどあるだろう。いつまでも、自分は“図書館で司書というこの仕事がやりたくていまここにいる”という最も単純なことを忘れずにいきたいと願っている。



図書館実習を終えて (1)

実習館：相模原市立相模大野図書館 専修大学文学部人文学科 (LH08-0198H) 中村 智子

私は8月3日から8月19日までの12日間、相模原市立相模大野図書館で図書館実習をさせていただきました。実習では、図書館概要をはじめ奉仕業務、予約、相互利用、運営、選書、レファレンス、AV、障害者・児童サービスなどの講義を受けたり、毎日3回の配架、カウンター業務、おはなし会などを実際にしました。

講義では、図書館の業務ごとに現状や課題を聞いたり現場を見学したりして、今まで疑問に思っていたことなどがだいたい解消され、大変勉強になりました。

実習は主にカウンター務が中心になっていて、カウンターは本(一般書中心)の貸出・返却のところで、ビデオ・CD等のAVカウンター、そしてこどものフロアのカウンターの3つがあり、実習生は私を含め3人いたので1人ずつローテーションで入りました。

こどものフロアのカウンターは、貸出・返却の他にビデオやLDの視聴コーナーもあり、その受付や検索・案内等の簡単なレファレンス的なことも少しやらなければなりませんでした。夏休みのせいもあり子どもが多く、課題図書や自由研究についての質問が多かったです。書名がわかっているものは検索も簡単なのですが、「外国の料理の本」「数学者について」「水の養分(成分)について」など、日頃の経験と分類の知識を使わなくてはならない質問については、すぐに答えられず、職員の方におまかせしてしまいました。幼稚園前の子から中学生までと様々な年齢の子と接することになりましたが、一番考えさせられたことは、小さい子に使う言葉でした。返却に来た子に処理をしてから「返却棚に戻してね」といった時、「へんきや

くって何？」と聞かれたりして、難しい言葉は使えないと改めて思いました。

AVのカウンターは図書館の入口に一番近く、登録や本の配架についてなどいろいろ聞かれることが多く、入口に近いカウンターの重要性を感じました。ここでは、ビデオやCDのケースと中身の確認など細かい作業が多く、なれるまで大変でした。ここでは大変だったことが2つありました。1つは、貸出しようとしたビデオのケースと中身が違っていたことで、それを借りに来た方には事情を説明し、他のものを借りていかれました。その逆のものはちょうどその日貸出されてしまったようで、職員の方に教わりながら、借りていかれた方に事情説明の電話をしました。もう1つは、外国の方で日本語がわからない方が何人来て、説明に苦労したことです。私は英語ができないので、延滞の注意や貸出冊数についてうまく説明できず、英語の重要性和図書館の国際性について考えさせられました。

一般書のフロアでも、質問が多く、新聞や地図、百科事典等の場所はすぐに教えることができたのですが、「世界のホテルについて調べるには」「自動車の法規について」「地域について」など、すぐに説明できないものは、調べものコーナーに案内したりしました。その他、図書館独自の「B」「F」などの記号や、「開架」という言葉の意味など、簡単そうな質問でもうまく説明できなかったりして、このようなことでさえ説明が難しいのだから、調べものコーナーはもっと大変なんだろうと思いました。

おはなし会についてですが、夏休み中だけ小学生対象に怖いおはなしをしているそうで、実際にや

ることになりました。一番難しかったのは、選書でした。これは短い・長いとか、これは知っているといわれそう、これは怖くないかも、難しすぎる言葉はだめ、といろいろ考えて選びました。心配だったことは、怖そうに話せるか、怖がってもらえるか、ということでした。当日は子どもが45人くらいと思ったより多く来て不安になったりしましたが、なるべく子どもたちの顔を見ながら頑張って話をしました。「怖くなかった」という子もいましたが、実際にやってみることでいろいろ勉強になりました。

この12日間、毎日、発見と反省の連続でしたが、よい経験ができたと思います。改めて公共サービスの魅力を感じ、今後も司書になれるよう努力していこうと思いました。



図書館実習を終えて (2)

実習館：新宿区立大久保図書館 専修大学法学部法律学科 (J08-0759J) 三浦 法子

私 はつい数週間前に図書館実習を終え、一昨日授業にて実習報告を終え、昨日はお世話になった図書館に予約していたCDを取りに行く、という図書館漬けの日々をこのところ送っている。法学部の学生が、なぜ「図書館」なのか。よく人から不思議がられるが、答えは至ってシンプルで、本が好きだからである。学部専門の勉強をやるのとはまた別の楽しさが図書館にはあるし、毎日通っても飽きないほど、私にとっては魅力的な場所なのである。だからこの一月余りの図書館漬けの生活は、私にとっては何の苦でもなく、むしろ喜びであった。

この「図書館実習」について知ったのは、後藤先生から実習の希望を聞かれた昨年末のことで、まさか希望を出しても行けないのだろうか、と思っていた。そして実習のことはすっかり忘れてしまった7月の終わりに、再び後藤先生から、実習の受入先が決まったとのこと連絡を頂き、驚きと嬉しさとの両方で、すぐに生田へ資料を取りに行き、受け入れて頂くことになった新宿区立大久保図書館に挨拶に伺った。そしてその日から3週間ほどたった9月7日から、いよいよ実習が始まった。

大久保図書館には職員の方が9人（内2人は非常勤）いらっしゃって、館長さんを中心に皆さんでかわるがわる私の面倒を見て頂いた。書架の説明にはじまって、カウンターでの貸出・返却・予約のシステムの説明と端末の扱い方、配架作業といった図書館の日常業務から、飛び入りでおはなし会に参加したり、他館への貸出依頼リストを作ったり、館長さんのご好意で、可能な限りのありとあらゆる事を実習させて頂いた。資料の

選書、受入から装備して実際に利用者に貸し出されるまでの流れだとか、障害者サービス等については、担当の職員さんから個別に時間の合間をぬってお話して頂いた。私のこれでもか、というほどの質問攻勢にも、皆さん嫌な顔一つせず最後の最後まで付き合ってくれたのも嬉しかったし、ありがたかった。

私がこの実習中で一番長い時間かけたのは配架作業である。書架の中をぐるぐるまわることでNDCを頭ではなく、体で覚えたように思う。利用者から「〇〇の本はどこにあるか」と聞かれて、はじめはたどり着くまでうろろうしていたのが、終わりの方では最短距離で行き着くことができるようになったのは、この配架作業を続けた賜物であろうと思う。また、書架から職員さんの利用者への対応を盗み見ては自分のお手本とした。プロの人にプロだというのは失礼なのかもしれないが、さすが図書館職員のプロだと思う場面がいくつもあった。職員さんの中に司書資格を持つ人は2人いらっしゃったが、司書であるなしに関わらず、職員全員が利用者に対し、それぞれ素晴らしいサービスをしていると思った。今回の実習で、今まで司書課程を学んで来て、あらためて司書って何だろうと考える機会となった。理論を学び、それがどう実際に生きるのか、また生かせるのか。この実習は、司書課程の集大成ではなく、司書になるため（司書について、図書館について考えるため）の通過点の一つとして、とても有意義であったと思う。学



生が実習に行ける、このようなシステムを持つ専修大学に感謝する。また、実習の終わりの方では、荻原先生が来館された。館長さんへのご挨拶だったのか、それとも私が真面目にやっているかどうかのチェックだったのか、いずれにしても、学生一人一人をこんなにも熱心に見てくれるのかと正直驚いた。私なんて、と思っていた部分もあったのだが、今更ながら先生方の愛情が身にしみた。また、今回受け入れて下さった大久保図書館の職員さんは、館長さんを筆頭に、特別に皆さん親切な良い方ばかりで、実習がたったの2週間ではなく、もっと来させて下さい、とお願いしたくなるほどであった。この館に実習に来れたこと、一利用者としてこれからもこの館を利用できることを大変嬉しく思う。

今回の実習では大変貴重な体験をした。司書課程を途中でやめてしまう友達もいたが、続けてきて良かったとつくづく思った。



学芸員課程

Index

1 鄙に稀なる中国陶瓷器	20
—— 専修大学文学部教授 亀井 明德	
2 卒業生から	22
3 博物館実習を終えて (1)	23
(2)	24

鄙に稀なる中国陶磁器

専修大学文学部教授 亀井 明徳

1996年に、ロンドン大学に長期海外研修で1年間滞在した。ロンドン大学のアジア・アフリカ研究学部付置のパーシバル・デビット財団美術館が、私の正確な所属場所であった。この美術館は、大きくはないが、中国美術、とりわけ選りすぐりの陶磁器を所蔵していることでは、世界的によく知られている。

ただ私のような形で長期に研究者を受入れるのは初めてであり、建物が小さいので、地下の書庫の一隅に机を用意してくれただけで、所蔵品を自由に調査して結構ですと、いうぐらいの便宜であった。あとから聞いたところでは、ここは調査について、厳しいので有名であり、写真撮影ひとつでも、いろいろと条件があるとのことで、私はそんなことは知らなかったもので、350点以上の作品をしらべ、すべての写真を自由に撮影でき、破格の待遇であったのかもしれない。

イギリスの夏は冷房は不用であり、美術館の開かれた窓から、心地好い微風がはいり、見学者もすくないので、ときには居ねむりをしつつ、調書を作成した。今年、この美術館の作品の一部が、大阪東洋陶磁美術館などで展示され、講演を依頼されたが、そのとき、来日していたキュレーターから、自分たちよりも所蔵品を長い時間かけてみた人と紹介されて苦笑した。

この美術館から、歩いて5分のところに大英博物館があり、こちらは展示品についての調査は、写真など誰でも無条件に許されているので、その東洋部門にも毎日のようにかよった。ただ、展示品以外の収蔵庫にあるものを出して調査するのは、手続きが必要であり、

午後2時から4時と時間制限され、撮影も原則的にはできないことになっている。これも、管理している中年の女性にカードとクッキーを折りにつれてもっていくと、時間など特別の配慮をしてくれる。撮影は、旧知の中国陶磁器部門のキュレーターの室に借り出してもらった形をとると、これも自由にできた。

こうした中心部の美術館はよく知られているが、イギリスの地方都市のさらに郊外にも、知られていない中国陶磁器の宝庫がある。ロンドンから車で、北へ3時間ほどのところにリーズという小都市がある。イングランドのほぼ中央部に位置し、その大学に、商学部の川村晃正教授が同じ時に、長期研修で滞在していたので、その美術館のパンフレットを同氏から送ってもらった。その小冊子には、わずかな中国陶磁器がのっているに過ぎず、あまり期待ももたずに、とにかく行くことにした。

奇妙な名前であるが、テンブル・ニューザムハウスが中国陶磁器を保有する施設である。リーズからさらにローカル線で30分ほど行った無人駅が、そのキュレーターとの待ち合わせ場所であった。約束の時間に駅でぼつんと待っても、いっこうに現われる気配がなく、近くに電話もない駅である。しばらくして、ボンコツ車で登場した若い方が約束していたキュレーターであり、自動車が途中で動かなくなり、申し訳ないといくりかえすので、かえって恐縮したが、いざ出発しようとする、またもエンジンがかからなくなっており、後ろから押すはめになった。

英国人は、古いものは何でも良いとする信念をもっているようであり、その車もどうやら20年前の

しろものであろう。とにかく、牧草と畑のなかを幸い停ることなく、目的地に着いた。名前から想像していたが、ここはかつてのマナー・ハウスで、その調度品を記念に飾っているところである。

ところが、中国陶磁器の部屋に通されて、以外に充実したコレクションであることに驚いた。特別にすぐれて、類例のすくないものはないが、一定のレベル以上の陶磁器が集められている。収集は1960年代のようであり、英国の他のコレクションが今世紀の20年代に中心があるのに比較して、新しい時期になされている。

自動車を押したおかげであろうか、キュレーター氏は、鍵をすべて開けるので、好きなようにして下さいと云って、部屋から出ていかれた。この待遇が一番望むところであり、親切に付き添っていたらと、何か話さなくては失礼になるような気がする、下手な英語で頭をめぐらす苦勞がおおい。ほっといていただくのが最高の扱いであり、おかげで61点の作品の調査をおえた。訪れた11月初めの日暮れは早く、暗いなかで、もう一度、あたかも出発の儀式のように車をふたたび押して、駅まで送っていただいた。ここに中国陶磁器があることは、わが国で紹介されたこともないが、興味ふかい美術館である。

ナポリを訪れたのは初秋である。ここにはポンペイの出土品などを集めた考古学博物館が有名であるが、私の目的地は、中心部からは離れたところにある国立陶磁器博物館である。ロンドン大学の図書館でみた、この博物館の図録のなかに、奇妙な元代の青花鳳形瓶が載っていた。実に不思議な造形であり、どうしても見たいという欲

求がわいてきた。その館は、観光客はほとんど行かないところのようであり、フニクラを乗り継いで、ナポリ湾を望む高台の白亜の建物であった。

いかにもイタリア人という私のイメージにあう館長氏が、わざわざこの1点のために訪れた奇特な日本人もこの世にいるのかという如き、イタリア語をはなしながら、2階にあるケースをあけ、高さ40cmほどの瓶を、小脇に裸でかかえ、カンツォーネのような鼻歌を歌いながら、階段をおりて、どうぞお好きなように、存分にみてくださいと差し出された。おそろしいほど気軽に運び、わが国の館務実習ならば、その学生は即刻実習停止であり、先生の顔がみたいとおこられるであろう。すべてイタリア語であり、英語を話すことはなかったが、すべてを理解できる不思議な人物であった〔図1〕。



図1 ナポリ陶器博物館長

この元代の瓶は、その器形がきわめて特異であり、鳳の頭部を蓋にして、肩には翼をひろげた形姿を、そして腰の太湖石から自生したかのような牡丹花を、それぞれ力強く描く筆力は、青花白瓷を生み出した、元代景德鎮窯の陶工の、なみなみならぬ創造性が発揮された作品である。類例が香港に1点あるが、頭部を欠損しており、比類稀なという形容詞があてはまる陶器である〔図2〕。



図2 元青花鳳形瓶

この博物館には、これのほかに、みるべき中国陶器はない。わずか1点といえば、アイルランドの国立博物館にも元代の白瓷瓶があり、私が調査を申し込んだころ、改築工事中なので、お見せできないとの回答であったが、当方の熱意がつうじて、どうぞということになった。首都ダブリンの中心から少し離れており、近くにギネス・ビアの工場が見えたところにある分館で拝見した。この白瓷が、ここに収蔵されたのは、最近のことであるが、その来歴がおもしろい。1338年に、シチリアを領していたハンガリー王家に、結婚式の祝い品として贈られ、その後、所有者が転々とかわり、断片的に所有の記録がわかり、19世紀の初めにイギリスに移動して、1961年に現在のところに落ち着いた。

この作品は、ヨーロッパに中国陶器がもたらされたことを、確実な年紀史料をもって語ることができる最古の白瓷瓶である。しかも、それがイタリアを経由している点が、興味ふかく、さきのナポリ品とあわせて、中国陶器が、ヨーロッパにもたらされる経路は、おそらくエジプトから、イタリア

をへて、各地に移動したことが想定できるが、まだ、調査不十分であり、ちかく再挑戦を計画している。

山形県の米沢市からバスで1時間ほど北上した東置賜郡小松は、井上ひさし氏の故郷の農村である。この地の酒造家が、中国陶器のコレクターとして著名であり、庭の土蔵を改築して、「掬粋巧芸館」をつくっている。ここには、重要文化財にも指定されている青花瓢形八角瓶がある。各面には、朝顔や葡萄のあいだに鈴虫やこおろぎが、白地に鮮明なコバルト・ブルーで描かれている高さ58cmの大作である。イスタンブールのトプカピサライ宮殿に類品があり、その冷え切った石造の旧厨房を改造した展示室で、立ち尽くしたことが想い出された。

今夏、大分県臼杵市に新設された「中国陶瓷美術館」の収蔵品を調査させてもらった。臼杵は、豊予海峡をのぞむ静かな城下町で、昨年ここに個人のコレクションをあつめた美術館が開館した。総点数160点の陶器が集められており、加彩駱駝俑、白瓷弁口瓶、青瓷稜花大盤など水準をこえる作品が数多くふくまれている。上品な感じの女性館長と、しばし言葉をかわした。遠方からの客人は「鄙には稀なる美術館」とのお誉めの言葉をいただくが、「臼杵を鄙の地とはおもっていません」という言葉が印象的であった。

リーズ、ナポリ、ダブリン、小松そして臼杵と喧噪をきわめる地ではなく、静かなたたずまいの街に、思いがけない優れた作品が蔵せられている。じつと熟成を待つかのように、訪れる人を暖かくむかえる鄙の地の美術館が、私は好きである。

卒業生から — 『実践と結果』

MOA芸術大学 5 期生 川上 健一郎（平成10年度 専修大学文学部人文学科卒業）

「実践と結果」の大学四年間

学生時代、自分が人から評価され、そして自分自身を推し量る基準は、自分の「実践と結果」に他ならない。学生時代に限らず社会に出てからもそうであるが、ただ社会の場合だと実践云々よりも結果重視であることはよく耳にすることであると思う。だが大学四年間は、その「実践と結果」のくりかえしや失敗もある程度許されるのであり、むしろ「実践と結果」こそ求められ、また自分自身に求めるべきものだろう。



「実践と結果」にはまず明確な目的が必要であるが、たとえば将来の希望する職業や自分が今何をすべきかといったことを、眉間に八の字を作りウンウン唸って模索することもないのではなかろうか。明確な目的を持っていなくとも、偶然に自分の前に現れた物事に対する「実践と結果」においても、学ぶところ大である。たとえば私の場合、落語研究会というサークルに偶然にムリヤリ入会させられてしまい、はじめ嫌でたまらなかったが、落語を聞いたり自分でやってみたりと「実践」していくうちに、落語という芸の面白さと奥深さを知り、また老人ホームや大ホールでの出演といった貴重な楽しい実体験を通して自分なりに得られた学びという「結果」があっ

た。実際、落語という芸術には舌を巻いたのである。落語の噺を即記本というかたちで読んでみても、面白くとも何ともないものが、演者々々の芸によって同じ噺が無限に変容するのであり、そのことを実体験によって得られたことは貴重であった。また偶然にはじめて交通整理のアルバイトも、つらかったがその新鮮な体験に楽しさと充実感すら感じる事ができ、現在の職業でもときおり交通整理を任されることがあって、その体験が大いに生きたことがあった。

私のこれらの貴重な経験と学びは、自分に偶然課せられた事に対して、「自分にプラスにならないから、やっても無駄なこと」と避けるのではなく、思い切って正面から「実践」していったことによって「結果」が得られたのだと、自信をもっていうことができる。

教職・司書・学芸員の課程履修生でそれらの職業を目指している方々は、自分の目的が明確になっている分、「実践」において自分がなにをすべきかということもわかりやすいだろう。しかし一見それらの課程に全く関係のないような経験も必要なのではなかろうか。一つの物事だけに執着して労力を費やすことも結構だが、そのことに溺れてしまうと発展性がなく、自分で自分の限界を作ってしまう危険性があることも、大学時代に私が学んだことの一つである。

たとえば自分は大学に勉強のためにきたの

だといって、それ以外にアルバイトもサークルもなにもしないという友人がいた。おかげで成績優秀であったが、その勉学によって得た知識は応用性がまるでなく、講義の内容そっくりそのまま、聞いてても面白味がなかった。つまり自分の勉学という方針にこだわって、その方針が自分の能力や考え方、個性を限定してしまい、しかもその限定に気づかない「井の中の蛙」で安穩としているのである。

はっきりいって、大学の私のまわりにはそのような人たちばかりだった。しかし、私はそれに流されないように、たえず独りで新鮮な「実践」の試みを求め続けてきたつもりである。なぜならば、それらの「実践と結果」によって、はじめて自分の学生生活に充実感を見い出せたからである。学生のみなさん、くれぐれも自分の日常生活に溺れず、多方面の「実践と結果」のくりかえしによって充実、達成感を求めて下さい。営みの継続が最も大切だと私は思います。



博物館実習を終えて (1)

実習館：相模原市立博物館 専修大学商学部商業学科 (C08-0170A) 浦 寿子

私 が実習を行った相模原市立博物館では、前半で博物館全体の業務等の見学、実習、常設展示の理解と検討をし、後半で資料の取扱い、日常的学芸業務等を行う、という博物館をオモテとウラから把握する2つの内容に分かれていました。

この様な2つの方向から学び、今までとは違う見方で博物館や学芸員について見直す事ができ、それまでに自分が持っていた考えとは異なる博物館や学芸員に対する認識を発見する事ができました。それだけでもとても貴重な体験ができたと思います。

まず前半の実習では、博物館の概要についての講義・博物館内を見学しながらの施設の説明などを受け、博物館の施設一つ一つが学芸員の意見を反映し、計算された上に作られている事に驚きました。また展示以外でも博物館が利用者にとって使い易い、心地良い空間となっている事を学びました。

また、前半の実習の最後には博物館を一般の利用者としてではなく、学芸員として見学しその考えをまとめるという、それまでには考えた事もなかった方向から博物館を見学し直し、それまでには気付かなかった事にも気付く事ができ、今までとは少し違った「博物館を見る目」を養う事ができました。

この前半の実習を終了してみると、私自身が持っていた、博物館と学芸員とについての理解が今までとは全く違う物となりました。それまでの私には、大きな博物館という存在に対して、学芸員の存在はそれほど大きく感じられておらず、「博物館が先」で「学芸員が後」という感覚を持っていました。

しかし、この前半の実習を受け、

それが実際は違っていた事に気付きました。博物館が大きな存在となるには、それ以上に大きな学芸員の存在があってこそなのだという事に気が付き、学芸員は「博物館を動かす人」であり、また「学芸員が先」で「博物館が後」なのではないかと感じる様になりました。

けれども考えてみれば、学芸員がいなければ博物館が正しく機能しない事は、当然の事であり、学芸員になりたいと言っていた私が、今までその事にも気付かないでいた事を恥ずかしく思い、また勉強不足であったと反省しました。

後半の資料の取扱いや日常的学芸業務の実習では、調査し研究する事の難しさを知りました。けれどもこの苦勞が博物館を大きな存在として感じさせるところへつながっているのだと確信しました。

また、その他にも市民の方々が参加して行われる教室講座の運営への参加やプラネタリウムの解説も行いました。

教室講座の運営に加わった際には、運営の全てをとりしきり、参加者の方々に親切に説明をする学芸員の姿に、学芸員のまた別の顔を見た様な気がし、同時に学芸員とは本当に色々な事をしなければならぬ仕事なのだ再確認されました。

そして、ここにきて初めて博物館と学芸員と利用者という3つの存在が、それぞれ独立した存在なのではなく、しっかりとつながって互いに支え合っている事に気付

き、また、博物館が教育の場であるのと同時にふれ合いの場ともなっている事が分かり、博物館というものがはっきり見えてきた様に思えたのです。

最後に、プラネタリウムの解説を行ってみて、私自身、星についての詳しい知識が全くなかったのでとても苦勞しましたが、その事によりやはり学芸員になるのである



実習のはじめに拓本道具をつくる

れば「これについてだけは自信がある」という自分の専門分野がなくてはならないのだと痛感しました。

以上の様に、この実習へ行った事により、新しい発見や自分自身にとって反省すべき点が見つかり、博物館や学芸員についての理解を以前よりもずっと深める事ができたばかりでなく、とても良い社会勉強ともなりました。

そして、博物館について学び、学芸員の仕事にほんの少しでも触れる事ができた事により、学芸員という仕事がとても大変な仕事であるのと同時に、大変魅力的な仕事でもあると感じ、今までよりも一層学芸員を目指し努力していこうという気持ちが強くなりました。

博物館実習を終えて (2)

実習館：福井県立博物館 専修大学科目等履修生（履修生497） 玉木 美由紀

博 物館は、展示をするにあたって、まずその館独自の特徴が何かということを考えなければならない。資料を公開することを目的とし、実物が展示されている福井県立博物館では、展示面積が全体のスペースの30%とゆとりを持って観覧できるようになっている。学芸関係の面積が広く、収蔵庫が全体のおよそ6分の1を占め、多数の資料をストックしておける。展示においては、自由な順路で観覧でき、資料の入れ替えがしやすい構造になっている。周囲の環境についても考慮されており、緑の多いところや公園、カフェテラスなどリラックスできる空間の1つとして博物館が存在する。このことは、この館に限らず博物館には当然求められることである。

博物館に属する学芸員はかなりオールマイティな能力が求められる職業である。研究能力を必要とし、教育普及や調査研究の対象としての地域社会とのつながりを大切にできる社交力を必要とする。また、展示の企画力、表現力がなければならない。人に見せる技術、技巧、感性が問われるトータルデザインセンスが不可欠である。「これではなければならない」というこだわりも必要だ。

考古分野の実習では、資料が展示されるまでの流れとして、埋蔵文化財発掘調査によって発掘されたものや、博物館が購入したり、寄贈されたものを整理していく段階の作業を行った。実習では遺物の洗浄とマーキングを行ったが、接合や復元の作業も必要である。

復元後、図面作成、調査、分析ののち報告書を作成する。そして収蔵する。収蔵庫は、空調などのコストの問題、作業のしやすさを考え、資料の乾燥・カビを防ぐため、室温21℃、湿度65%に保たれている。

美術工芸品の取り扱いの授業では、卷子、掛軸、屏風、焼物の入った箱の取り扱いを行った。展示する度に資料はいたみ、状態が変化していくのは仕方のないことであるが、それを最小限にとどめるということを念頭において扱った。



絵巻の取り扱いの実習

物に対しての思入れや心遣いをもつことを忘れてはならない。早くて楽に扱える方法を取ってしまうがちだが、普段の生活と同じ扱いをするべきでないことを、常に忘れてはならない。

文献資料を中心にした資料の整理では、受け入れから保管までの作業行程の中で、目録作成の前準備としての分類を行った。搬入されたものは、薬剤を使って殺菌・殺虫処理がなされている。整理時はボールペンは使わず鉛筆を使う。虫食いなどで密着している資料は無理にはがさない。種類の違うものでもひとまとめにしてあった場合は、一緒にされていたことが手

がかりになることもあるので別にしない。資料は形態ごとに分類していく。手袋をして扱う。貴重な文化遺産と対面しているという自覚を持つ。保管する前に予防措置をし、原型のままで残すことを目的とした材料・方法で補修をする。

民俗資料を扱った授業では、有形民俗資料のスケッチをした。スケッチをすることでデータを人と共有でき、物を理解することがができる。物を理解することに関しては、クリーニング（洗浄）の段階でも同じことが言える。断片的な部分でも十分な手がかりになるため、大きな特徴ではなくとも書きとめておく必要がある。

年中行事の中から1つをしばり、行われている地域の分布図を作る作業では、示したいことが明確に図から読み取ることができるようになること、解説文をつけるときに、推測で文章を書いてはならず、確実に分かっていることを書かなければならないということを手

学んだ。実習では、限られた時間の中で、ごく一部ではあるがさまざまな資料に実際に触れることによって新しい発見ができ、貴重な発見ができた。勉強不足を感じると同時に、自分に必要なものは、もっと柔軟な見方で奥深くものをみつめていくことではないかと感じた。



データ編

Index

1 平成10年度履修者数	26
2 平成10年度免許状取得者数	27
3 平成10年度実習生一覧（教職）	28
4 平成10年度実習生一覧（図書館）	31
5 平成10年度実習生一覧（学芸員）	31
6 主な就職先一覧（教職）	32
7 主な就職先一覧（司書・学芸員）	33
8 平成10年度 教職・司書・司書教諭・ 学芸員課程年間行事表	34
9 平成10年度資格課程教員紹介	35

平成10年度 教職・司書・学芸員課程履修者数

	年次 学部・学科	1年		2年		3年		4年		小計		合計
		1部	2部	1部	2部	1部	2部	1部	2部	1部	2部	
教職	経済学部（経済）	29	9	28	13	32	10	30	5	119	37	156
	経済学部（国際経済）	15		13		8				36		36
	法学部	48	16	53	11	21	16	41	8	163	51	214
	経営学部（経営）	6		12		21		16		55		55
	経営学部（情報管理）					2		1		3		3
	商学部（商業）	39	11	52	11	37	7	26	8	154	37	191
	商学部（会計）	1		1		1		4		7		7
	文学部（国文）	46		58		65		43		212		212
	文学部（英米文）	29		36		32		29		126		126
	文学部（人文）	33		26		48		30		137		137
	文学部（心理）	2								2		2
	大学院	15		2						17		17
	科目等履修生		35								35	35
	小計	263	71	281	35	267	33	220	21	1031	160	
	合計	334		316		300		241		1191		1191

	年次 学部・学科	1年		2年		3年		4年		小計		合計
		1部	2部	1部	2部	1部	2部	1部	2部	1部	2部	
司書	経済学部（経済）	5	2	2	1	3	2		1	10	6	16
	経済学部（国際経済）											
	法学部	7		3	3	2		7	4	19	7	26
	経営学部（経営）	2		1				1		4		4
	経営学部（情報管理）	1								1		1
	商学部（商業）	3	1		2	1	1	2	1	6	5	11
	商学部（会計）											
	文学部（国文）	25		26		25		15		91		91
	文学部（英米文）	2		6		2		1		11		11
	文学部（人文）	22		7		13		12		54		54
	文学部（心理）	1		1						2		2
	大学院	2								2		2
	科目等履修生		8								8	8
	小計	70	11	46	6	46	3	38	6	200	26	
	合計	81		52		49		44		226		226

	年次 学部・学科	1年		2年		3年		4年		小計		合計
		1部	2部	1部	2部	1部	2部	1部	2部	1部	2部	
学芸員	経済学部（経済）	7	1	3	1	4	2	7	2	21	6	27
	経済学部（国際経済）	1		1		1				3		3
	法学部	4	1	4	1	3	1	1	5	12	8	20
	経営学部（経営）			3		5		10		18		18
	経営学部（情報管理）	1								1		1
	商学部（商業）	5	2	3		12		7		27	2	29
	商学部（会計）							3		3		3
	文学部（国文）	9		12		14		14		49		49
	文学部（英米文）	4		3		4		5		16		16
	文学部（人文）	29		19		34		34		116		116
	文学部（心理）					1				1		1
	大学院	1								1		1
	科目等履修生		9								9	9
	小計	61	13	48	2	78	3	81	7	268	25	
	合計	74		50		81		88		293		293

平成10年度 教職免許状取得状況一覧

	免許種類	中学一種				高校一種				中学専修				高校専修				合計
		社会	国語	英語	小計	地理歴史	公民	商業	国語	書道	英語	小計	社会	国語	英語	小計	英語	
生田	経済学科	15	15	15	15	16	14	3	33									48
	授与件数	15	15	15	15	16	14	3	33									48
	申請者数							13	13									13
	授与件数							12	12									12
	申請者数							1	1									1
	授与件数							1	1									1
	申請者数	4		4	4	5	3	9	17									21
	授与件数	3		3	3	3	1	6	10									13
	申請者数							3	3									3
	授与件数							3	3									3
	申請者数		26		26				35	2		37						63
	授与件数		24		24				33	2		35						59
	申請者数			22	22						24	24						46
	授与件数			22	22						24	24						46
	申請者数	13			13	24	6		30			30						43
	授与件数	13			13	23	4		27			27						40
	申請者数																	
	授与件数																	
	申請者数																	
	授与件数																	
	申請者数																	
	授与件数																	
神田	申請者数																	1
	授与件数																	0
	申請者数												6	5		11	6	1
	授与件数												3	3		6	3	1
	申請者数												6	5		11	6	1
	授与件数												3	3		6	3	1
	申請者数																	0
	授与件数																	0
	申請者数	32	26	22	80	45	23	29	35	2	24	158	6	5		11	5	13
	授与件数	31	24	22	77	42	19	25	33	2	24	145	3	3		6	3	7
	申請者数	24			24	30	33		63									87
	授与件数	23			23	25	31		56									79
	申請者数	2		2	2		2	1	3									5
	授与件数	1		1	1		2	1	3									4
	申請者数	2		2	2	1	4		5									7
	授与件数	2		2	2	1	4		5									7
	申請者数	1		1	1	1		4	5									6
	授与件数	1		1	1			4	4									5
	申請者数												1			1		2
	授与件数												1			1		2
	申請者数	4	2	2	8	6	2	2	15		2	15						23
	授与件数	4	2	2	8	6	2	2	15		2	15						23
	申請者数	33	2	2	37	38	41	7	91		2	91	1			1		130
	授与件数	31	2	2	35	32	39	7	83		2	83	1			1		120
	申請者数	65	28	24	117	83	64	36	38	2	26	249	7	5		12	6	14
	授与件数	62	26	24	112	74	58	32	36	2	26	228	4	3		7	3	355

データ編

Passo a Passo

編集後記

表題は今年度赴任された先生の歓迎会の席で決まりました。ほろ酔いで頭の回転がよかった成果かもしれませんが。さて原稿をお寄せいただいた教職員、卒業生さらに現役生の皆さんに感謝。さらに実務を一手に引き受けてくれた桐生さんにも御礼を。協議会委員長時代に考えていた構想が実現して人一倍喜んでいきます。本誌が資格の取得をめざし、さらに難関の職を得るための励みになることを期待しています。

(経営学部教授・嶺井 正也)

西暦二千年を目前にして、世の中が何やら慌ただしい。しかも、不況で人が走り回り、就職環境が厳しいから、学生も走り回って、なおさら慌ただしい。本年、東京国立博物館に平成館がオープンし、最初の特別展のテーマが「金と銀」だった。この大変な時期に、と思った人もいたかもしれない。しかし、「金」は我が国の美術では「光」として意識された色であったという。慌ただしい私事に追われながら平成館を見て、不況を払う二千年の曙の光が差すことを願わずにはいられなかった。

(経営学部助教授・内田 欽三)

3つの資格課程の合同作業で、いよいよ創刊。嬉しいです。とはいえ、「産みの苦しみ」の方はすっかり他の方々にお任せで申し訳ありません。来年度からは、育てる「楽しみ」や「苦しみ」を存分に味わいたいと思っています。

(経営学部講師・荻原 幸子)

編集委員に名前を連ねていながら、たいした働きもせず、編集会議で勝手なことを言っているだけだったような気がします。気が付けば、立派なゲラ刷りができあがっていました。資格課程のWebページにもこの年報を掲載したいと思っています。その時に、少しはお役に立てればと思っています。

(文学部助教授・砂原 由和)

「手にとってもらえる、読んでみたくなる」を目標に作り始めた資格課程年報も、とうとう創刊。シンプルに嬉しいです。素敵な原稿を書いて下さった方々、優しくて素敵な年報編集委員の先生方、本当にありがとうございました。

(教務部教務課・桐生 まい子)

平成10年度 専修大学 資格課程年報『パッソ ア パッソ』

発行日 平成11年10月30日

編集 専修大学

生田校舎 教務課 資格課程係

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

TEL 044-911-1259 FAX 044-911-1241

神田校舎 教務課・二部事務課

〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8

TEL 03-3265-5843・8359 FAX 03-3265-7084

URL <http://www.senshu-u.ac.jp/school/shikaku>

印刷 株式会社 芳文社

〒194-0035 東京都町田市忠生1-18-18

TEL 042-792-3100